概　要　報　告

実施期日	８月２日(水)
部　会　名	小学校　特別支援教育部会

神奈川県研究主題

個々の子どもの困難さに応じた指導内容や指導方法の工夫

テーマ

『個に応じた交流の在り方について　～関わり方の構築～』

提案概要

【実践に向けての課題意識】

個別の指導計画作成時、児童一人ひとりの実態を再確認したところ、多人数では自分の気持ちや感情をコントロールすることが難しかったり、他者の発言に対して積極的に関わったりしようとはするが、双方向のコミュニケーションが十分に身についていない児童が多くいた。

そのため、特別支援学級での支援計画を立てるとともに、通常の学級（交流級）との交流の中での学びにも目を向けることが必要であると感じた。一人ひとりの児童の実態に即した目標を立て、交流の在り方を再計画することで、児童同士の関わりを通してできることが増えたり、社会性を身に付けたりすることがよりできるようになるのではないかと考えた。

【年間の指導計画の工夫・改善について】

（１）個別の指導計画の見直し

児童一人ひとりの実態を改めて確認し、個に応じた交流に関する活動の目標を設定し、目標に応じた交流級での「交流及び共同学習」を計画した。

（２）年間活動計画

〇仲よし七夕ロード

図工の学習「七夕飾りを作ろう」では、地域の方から竹をいただき特別支援学級前の廊下に設置した。全児童・教職員に短冊を配布し、呼びかけを行ったところ、多くの教職員・児童が活動に参加した。そのことで、自然と特別支援学級の児童と、通常の学級（交流級）の児童との関わり合いが増え、お互いを知る機会となった。

〇クリスマスリースプレゼント

畑で育てたサツマイモの蔓を使ってクリスマスリースを作製し、完成したものを児童本人が交流級へ届けに行き、教室に飾った。交流級の児童が喜んでいる姿を見て、特別支援学級の児童は自信をつけたり、達成感を味わったりすることができた。また、交流級の児童との関りが深まった。

【児童の変容】

「仲よし七夕ロード」学習、「クリスマスリースプレゼント」学習それぞれにおいて、児童の実態を再確認し、個別の目標を立て、個に応じた支援・指導を行ってきた。

この取組を通して、相手の話を聞くこと、また自分の思いや考えを伝えることが苦手な児童が交流級での学習に楽しく参加し、「仲よし七夕ロード」の開催時に自ら交流級の友だちを誘いに行く等、交流級の児童と過ごすことが増えた。また、複数の児童が、直接交流級に登校し、「朝の支度」「朝学習」「朝の会」「帰りの会」など、交流級で過ごすようになった。もちろん支援が必要な場面では特別支援学級に学びの場を移して学習に取り組むようにしている。

質疑応答概要

〇「七夕ロード」学習は、小中で連携して毎年行っている活動なのか。

→特に意図して近隣の小中でタイアップした、というわけではなく、偶然同じような取組となった。今後は、行事だけでなく普段から積極的に小中連携を図っていきたいと考えている。

〇交流級の担任への、特別支援学級に在籍している児童理解への取組はどのようにしているか。

→支援シートの活用、普段から交流級の担任と、児童の様子を伝え合っている。

協議の柱及び協議・概要

１．学校全体で取り組んでいる交流の具体的な実践について

・子どもの実態に合わせて、授業や給食交流を行っている。

・近隣の特別支援学級同士で交流を行っている。

・発表を通して、普段から意識的に、特別支援学級と通常の学級が交流の時間をもつことが大切であると気づいた。

・特別支援教室に通う児童と特別支援学級の児童とが一緒に調理実習に取り組んでいる。

・「１年生と友だちになる会」を企画し、入学してきた児童と一緒に歌やゲームを通して交流した。その会をきっかけに、１年生の水遊びの学習の際も、一緒に活動を行うことになった。

・子どもの実態がそれぞれ違うので、普段の授業交流についても差があり、交流の目標もそれぞれ異なる。児童の実態に即して行っている。

２．交流を行う際に、具体的にどういう目標を立て、どういう手立てを講じているか

・通常の学級の児童は交流を通して多様性を知ることができ、特別支援学級の児童は社会性を養うことができる。どちらにもそれぞれのメリットがある。

・学習する際、子どもたちが発信できて、子ども主体でみんなが楽しめる土台作りをする必要がある。

・交流学習を学校全体で作り上げていくために、職員の意識改革が必要である。担任同士がよく打合せをし、学校全体でも共有していく必要がある。

・児童理解のため、通常の学級の担任と特別支援学級の担任で個別面談を設けた。児童それぞれの目標や手立てについて改めて共有することができ、交流学習についても検討することができた。

・授業交流の際、同じ課題に向き合いながら、個々の実態に合わせて、個に応じためあてを設定し、合理的配慮のもとに教育活動を進めていけるよう学校全体で取り組んでいる。

・保護者のニーズと、子どもの実態にズレがあると難しい。そのような時には、学校での様子を実際に見てもらい、正しい情報を入れながら、丁寧に説明するようにしている。

まとめ概要

〇個人の特性や背景に応じて、課題や目標設定をすること

・児童一人ひとりの実態把握を十分に行い、教育支援計画、個別の指導計画に基づいた指導内容を計画し、同じ活動であっても異なるプロセスで、それぞれの児童の実態に基づいた指導実践をしていく必要がある。

・指導の後には評価をし、一人ひとりの目標を見直し、また指導者が指導方法の見直しをすることが必要不可欠である。

・活動の意欲を向上させるためにも、子どもたちが自己決定できる場面設定が大切である。子どもたちが主体的に学習に取り組めるよう、日頃から子どもたちの気持ちに寄り添った支援を心がけ、活動に消極的な時には、なぜそのようになっているのか、一緒に考えていくことが重要である。

〇どのように子どもたちに適した教育環境を整えるか

・多様性を尊重すること、主体性重視のニーズ対応をすることで、インテグレーションからインクルーシブな学校づくりに繋がっていく。

・子どもたちの実態・教育的ニーズに即し、学校の中に多様な学びの場を作り、それぞれがつながっていくことが大切である。

〇交流及び共同学習について

・多様な学びの場を整理していくということは、インクルーシブ教育推進ではなく、分離教育を推進してしまうことに繋がりかねない側面もあるため、各学校・地域等において交流及び共同学習について充実させていく必要がある。

・交流及び共同学習は、双方の児童・生徒の教育的ニーズを十分に把握し、障がいの有無に関わらず、みんなが活動に意義を感じ、成長していくものであることが肝要である。